



## \* 第9回 \* 石井 勢津子

美術家

### ホログラフィーアーティスト として

#### ディスプレイホログラ フィーの背景

3次元画像技術であるホログラフィーは、計測やセキュリティなど産業や工業分野への応用は広く知られています。しかしディスプレイ、特にアートやデザイン分野への応用はまだまだポピュラーとは言い難い状況にあります。それは技術そのものがパソコンやデジタルカメラのように誰でも気軽に扱える環境にはなく、特別な設備が必要なためです。具体的にはレーザー関連の光学実験設備で、このような設備は企業の研究所や理工学系大学には多く見受けられますが、芸術系大学では稀です。芸術系には少し専門的過ぎる科学技術の知識と設備というのが理由の一つのようです。アーティストやデザイナーがホログラムに興味を抱いても、なかなか創作に至らないのはこのような背景が影響しています。ディスプレイホログラフィーは、まさにサイエンスとアートの境界領域あるいは狭間(または谷間)に位置し、科学技術や知識のサポートなくしては具体的な制作の実現が難しいなかなか厄介なメディアなのです。そのようなホログラフィーを、私はアートの表現メディアとして選び、その可能性を追い求め現在に至っています。フリーで活動が続けていますが、2013年の活動は少しバラエティに富んでいました。

#### 活動の近況

7月、台湾新竹の国立交通大学でディスプレイホログラフィーのワークショップを担当しました。実は台湾での講座のお手伝いはこれが2度目です。初回は、国立台湾師範大学の光電研究所で開講された半年間のホログラフィーコースを、大学側の先生と共同で私はソフト面を担当しました。縦割りの学科の壁を取り除き工学、アート、デザイン、教育などいろいろな学科から受講可能なコースとしました。今回の交通大学の1週間の集中講座では、学内の技術系学生だけでなく、他大学から芸術系の学生が参加できるようにしました。日頃交流の少ない学生同士が一緒に実験に携わり、彼らにとっても貴重な体験になったと思います。受講者の一人の女子学生はこの講座を受講のため留学先のイギリスから一時帰国、帰る直前にケルン(ドイツ)のアカデミーで制作したばかりというホログラム作品を披露し、その行動力は他の学生たちに大変刺激になったと思われれます。

9月には、モスクワでオプトエレクトロニクス関連の国際会議に招待されました。アートホログラムの展示が条件で、作品(約85 cm × 110 cm マルチカラーレインボウタイム)をかかえて出かけてきました。フィルム状態で持って行き、設営材料はすべて現地準備してもらいました。参加者のほとんどは技術・ビジネス分野からで大きいディスプレイホログラムを目にする

のが初めて、私は孤独に一人ホログラフィーアートの伝道師の如く作品紹介するといった状況でしたが、アートへの応用を知ってもらう大変良い機会でした。

12月は、久しぶりのホログラムの作品制作に極寒のオハイオ州立大学に出かけました。数年前この大学にニューヨークのホロセンターからパルスレーザーラボが移設されました。私は2013年度のアーティスト・イン・レジデンスの助成を授与されて、1週間パルスレーザーによるマスタホログラムの制作をしました。翌週バーモント州のラボに移動し最終作品(マルチカラーレインボウホログラム、85 cm × 95 cm)を制作してきました。オハイオ州立大学では、秋講座にホログラフィーコースが2クラス開講され、そこでは学科年齢多様な学生が受講していました。私もコース最終日に講演を依頼され、これまでの作品を紹介しましたが、学生たちの反応はなかなか良く、特に一人の芸術系の女子学生はホログラフィーを将来のアート活動に取り入れたいと熱く話に聞き入っていました。

私の活動は大きく分けて4種に分けられます。(1) [啓蒙・教育]、(2) [制作]、(3) [展覧会]、(4) [社会への応用]です。前半の2件は(1) [啓蒙・教育]、後半は(2) [制作] 活動といったところでしょうか。助成を受けてわざわざアメリカまで出かけて制作した理由は、制作には特別な設備と環境が必要で、オープンにアートホログラムを制作できるラボは世界でもかなり限られてい

"As a Holography Artist" by Setsuko Ishii  
(Artist)



るためです。通常ラボを借りて制作するためにはレンタル費用や材料費などの経費(これがかなり高価でして)がかかりますので、助成がうけられることは非常にありがたい状況ということになります。2013年度の1名のアーティストへのグラントに選ばれたことはラッキーでした。(3)[展覧会]はこれまで国内外の数多くに出品してきました。展覧会はアート活動のメインと言えます。しかし展示方法は、絵画や彫刻などに比べかなり複雑なため、既存の美術館やギャラリーでの展示には苦勞がつきものです。(4)[社会への応用]とは私の作品の場合、例えば、建築空間に恒久設置するなどの委託制作です。理想を言えば(4)が全活動の経済基盤となるべきところですが、これがまた至難なことで苦勞が多くなかなか理想通りに行かないのが大きな悩みです。

(1)～(4)の活動のいずれも進めていくためにはいろいろ難題が控えています。それは先達のいない新しい分野の開拓には(どのような分野でも同じことが言えると思います)必ずついで回る苦勞でしょうから、自ら選んだ道なので致し方ないと自分に言い聞かせています。

### ホログラフィーとの出会い

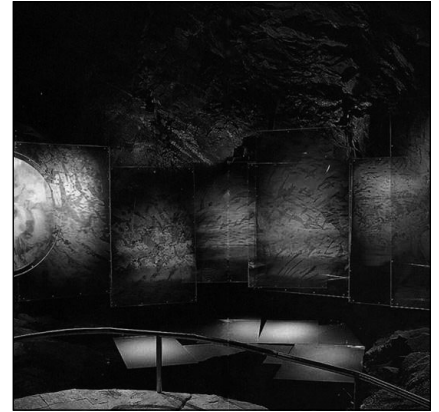
学部では応用物理を学びましたが、大学在学中に進路に疑問を抱き、卒業後美術学校に入り直しました。そこでは油絵とヨーロッパ中世の古典技法などを学び、卒業後はパリのエコール・デ・ボザールにも留学いたしました。しかし結局絵具、筆という表現メディアに満足することができず暗中模索していた時期に偶然、街の中で店舗のディスプレイ用のホログラムに出会いました。円筒形のタイプで、3次元イメージが空間に確かに存在して見えるのに手中に捉えることができないという、今まで経験したことのない視覚体験に非常に衝撃を受けました。そしてこれは何?もっと知りたいと周囲を見まわした結果、東工大に最先端のホログラフィーの研究室があることを知り、

もう一度母校に戻り研究生としてホログラフィーを学ぶことにしました。この時脳裏をよぎったことは、せっかくアートの世界に歩み出したのにまた技術の世界に舞い戻ってしまうのではないかという不安でした。ホログラフィーがアートの表現メディアとして可能であるか否かはまったく不明でした。しかしこの分野に飛び込んで気づいたことを例えて言うと、ちょうど暗いトンネルに入って初めは何も見えませんが、少し慣れてよく目を凝らすと遠くに出口が見えてきました。ところがその出口は一つではなくいくつもあることに気付いたのです。それぞれの出口はいろいろな応用の可能性を示唆し、それがどれもとても興味深いものだったということです。結果は私を予期せぬ広い世界へと導く手助けをしてくれました。3次元画像であることが私の意識を平面の絵画から立体作品へと広げました。光を媒体としたメディアであることが太陽光にも目を向け、室内の作品から野外の環境作品へと興味を広げることになりました。先達のいないまったく新しい分野には、どんな展開も可能でありすべてが自由です。まだまだ見つけていない別の出口がまだあるのではと思わせるわくわく感もあります。先に述べた苦勞話は結局この自由やわくわく感とトレードの関係にあるのかもしれませんが。この分野に足を踏み入れて35年、苦勞があっても続けてこられた理由でしょうか。

### スモールワールド

現在形のメディアですので展開もいろいろな国で同時進行しています。この新しいメディアを通して、世界のいろいろな国とつながることができました。

モスクワ行のきっかけは前年中央アジアのキルギスの光学のカンファレンスに出席したことでした。一般的に技術系の国際会議、会議主催者にとってアトラクションとしてアートホログラムは興味ある展示と映るようで、このような展示や発表の招待依頼の機会が多々あります。モスクワの会議はほと



水の波紋とマルチカラーレインボウホログラムのインスタレーション、地下岩盤空間レトリックアートセンター、フィンランド(1994)

んど知る人のいないアウェイの地、と少々心細く出かけたのですがサンクトペテルスブルクからの開催委員の一人の方から声をかけられました。「お会いするのは2度目ですね」、「は?」、「あのプランは実現したのですか?」、「・・・はい」。びっくりです。実は1989年旧ソ連時代ウクライナのキエフで開催された国際会議に出席しましてその時の私の講演内容についての質問でした。ホログラムを使った野外のアートプロジェクト、当時進行中のプランを発表しました。野外の浅い人工水路の底にタイルの一部に鯉のイメージのホログラムを埋め込むというものです。太陽光で画像は再生され、水の揺らぎで鯉が泳いでいるように見えるというアイデアです。名古屋の公園で実現しました。モスクワはアウェイの地ではありませんでした。観光旅行先としてはまだまだ気楽には行き難いモスクワに1週間滞在、素晴らしいヨーロッパ美術の収集で知られる美術館めぐりができたことも、ホログラフィーアートの恩恵と感謝しています。スペインのセビリア万博(1992年)では大型のホログラムを展示しました。この作品についてはいくつも後日談があります。一つはそれを見たブラジルの芸術大学の教授から展覧会の出品にサンパウロに2度招かれました。また数年後、ディスプレイホログラフィーカンファレンスで出会ったポル

トガルからの出席者たちがこの作品を見て知っていたことです。もう一つ驚いたことは、2009年に国立台湾師範大学で私の個展が開催されたのですが、その時、デザイン学科の教授から「セピリアであなたのホログラムを見えています」と声をかけられたことです。20年も経た後にも「見たよ」と声をかけられた時苦勞が多く大変でも活動を続けていてよかったとしみじみ思う瞬間です。余談ですが数カ月前あるパーティの席で出会ったサンパウロの日系の方と話をしているうち、以前サンパウロに招かれ展示された作品を見て覚えていたことが判明。まさにスモールワールドを体現しています。

### 展覧会あれこれ

ユニークな展覧会としては、フィンランドでの地下岩盤に掘られたレトレッティー・アートセンターの展示でした。夏の数か月間だけでしたがホログラフィーと3Dの音と水の波紋を取り入れた大掛かりなインスタレーションでした。このセンターは地上までせり出した花崗岩の岩盤を数十m掘り下げた地下空間に展示ギャラリー、コンサートホール、そしてカフェやレストランを兼ね備えたほかに例のない非常にユニークな施設です。天井や側面は荒々しい岩盤の岩肌がそのまま残され、迷宮を思わせるような有機的空間は、そこを訪れる人々に今まで経験したことのない奇妙で不思議な感覚を体験させてくれます。ホログラフィーの色鮮やかな非物質の光の像とその対極にある音も光もないモノクロの硬質な物質の地下岩盤世界は、二つの対比によって両者の特徴がさらに増幅され、まったく新しい空間演出が実現できました。場所はヘルシンキから約500km北に位置した小さな村ですが夏は隣の街で国際オペラフェスティバルが催され、この地下コンサートホールも会場としてスケジュールに組込まれています。展覧会を訪れたほとんどの観客はもちろんホログラフィーの予備知識などまったくありません。しかし皆



“太陽の贈り物シリーズ”，ホログラフィンスタレーション，古代ローマ遺跡ヴィラ・デ・クインティリ，ローマ，イタリア（2009）

空間演出を大いに楽しんでいたと後でスタッフから聞きました。

野外で記憶に残る展示は古代ローマ遺跡ヴィラ・デ・クインティリの野外インスタレーションです。光を分光するだけのホログラフィーグレーティングを利用した野外作品です。およそ60cm×60cm×60cmの立体オブジェ300個を遺跡の丘の草原に点在させました。この色は太陽の高度の変化につれて赤から緑、青と変化し、また視点の移動でも色は移り変わっていきます。この遺跡には新アップピア街道が隣接してしまして、車の中からも丘のうえに色鮮やかな点が緑の中に点在しているのが見えます。この鮮やかな光の色彩は大自然の太陽からの贈り物です。雨上がりに偶然出会える虹を、ホログラフィーは自由自在に手中に収めることができる、そんなイメージがもしれません。

展覧会の準備作業にはほとんど立ち会います。ただ壁に掛けるだけとか床に置くだけというわけにはいかないインスタレーションだからです。海外の場合、一緒に働くスタッフはと言いますと、美術館の学芸員やコーディネーター以外は電気工事の技士や大工さんたちです。いわゆる美術展の準備とは一味もふた味も違いますが、おかげで少しディープな文化も体験できて面白いです。

### 雑感

ところで海外のホログラフィーアーティストに目を向けると興味深いこと

に気づきます。実は女性アーティストと男性アーティストの割合が、他のアート分野に比べ女性が多い印象を受けます。美術の世界は保守的な世界と言われる通り、かなり男性社会のように見受けられます。美術館でも新しいメディア関連の部署に比較的女性キュレータが多いようです。既成の分野に比べ新しいメディア分野の方が白紙からのスタートであるゆえに、既成の制約を受けることなく自由に活動可能であり、女性キュレータや女性アーティストにも広く門戸が開いているということでしょうか。同じような印象を抱いている人は私一人ではないように思われます。しかしホログラフィーアートの分野に比較的女性アーティストが多い理由はこれだけではないかもしれませんが。台湾交通大学でのワークショップでの非常に行動力ある学生が女子学生であったこと、オハイオ州立大学でも非常に積極的にホログラフィーに取り組んでいた学生がやはり女子学生であったことは印象深いことです。実はモスクワの会議に一人絵を描いているという若いアーティストが参加していました。作品にホログラムを取り入れたいと考え、参加費（それなりに高い）を払い、技術の専門会議に参加したそうです。積極的に情報収集に飛び回っていたその人物も実は女性のアーティストでした。

私自身、創作活動において女性であるかどうか意識をした記憶がほとんどありませんでした。振り返ってみると、進む道を選択しなければならぬ場面に出くわした時、いつでもしがらみを感じることなく自由に選択してきたように思います。結果が是であったか非であったかは多分私自身が決めることなのでしょう。もし後輩たちに伝えたいことはと聞かれましたら、「自分の進む道は自身で決めてください。それがどのような道であっても、自身の選択した道であれば、例え障害物があっても乗り越えられると信じたいです」

(2013年12月26日受付)